

令嬢はまったりをこそ望む。

## ラクレイン

鳥に似た姿を持つ幻獣。  
ローニャと契約している。

## シュナイダー

ローニャの婚約者。  
けれどミサノに  
心移りして——？

## ミサノ

小説の主人公。  
ローニャを敵対視  
している。

## シゼ

獣人傭兵団のボス。  
獅子の姿を持ち、毛並みは  
純黒。寡黙で強面だが、  
心根は優しい。

## チセ

獣人傭兵団の一人。  
狼の姿を持ち、毛並みは  
青色。ステーキが好物で  
とても野性的。

## リュセ

獣人傭兵団の一人。  
チーターの姿を持ち、  
毛並みは白色。  
容姿端麗でツンデレ担当。

## セナ

獣人傭兵団の一人。  
ジャッカル<sup>ジャコウ</sup>の姿を持ち、  
毛並みは緑色。読書が  
趣味で、面倒見が良い。

## ローニャ

とある小説の世界に、  
悪役令嬢として転生した  
少女。小説の筋書き通り  
婚約破棄された後、  
第二の人生をまったり  
過ごすべく、田舎街で  
喫茶店を始めた。

## ロト

蓮華の妖精。  
甘いものが大好き。

## 第1章 ❖ 奇跡をご所望。

### 1 悪役令嬢の初恋。

かつて私は、息つく暇もないほど忙しい日々を過ごしていた。

学生の本分は、学ぶこと。社会人の本分は、働くこと。

勉強に仕事——気が付くといつも時間に追われていた気がするけれど、社会人になってからは学生時代以上にせわしなかった。

朝早く起きて職場に行き、くたくたになるまで仕事をして、夜遅くに帰宅する。その繰り返し。

次第に頭がぼんやりすることが多くなり、眩暈めまいに襲めわれることもあった。

そんな中、唯一の楽しみはネット小説を読むことだった。

もっとも、ゆっくり読んでいる時間なんてない。だから通勤の時間や眠る前の短い時間、時には簡単な料理を作りながら、あるいは食事をしながら、ネット小説を読み漁あさっていた。

そしてあの日、私はある短編小説を見つけた。

ストーリーは、主人公ミサノが悪役令嬢ローニヤを打ち負かし、ローニヤの婚約者を奪ってしま  
うというもの。

——主人公は、どんなふうに悪役令嬢から婚約者を奪うのだろう。  
そんな好奇心から、私はその短編小説を読み進めた。

ヒロインは男爵令嬢、悪役は伯爵令嬢。冒頭から二人の攻防がはじまり、熾烈な戦いが繰り広げ  
られる。

伯爵令嬢はもちろん意地の悪いキャラクターだけど、男爵令嬢もなかなか攻撃的なキャラクター  
だった。悪役である伯爵令嬢を自ら返り討ちにしようとするのだ。

その結果、悪役令嬢は公衆の面前で悪事を暴かれ、婚約者を奪われ、エリート達の集う学園から  
も追放される。一方、ヒロインは想い人と結ばれてめでたしめでたし。

小説を読み終えた私は、思わず首を傾げた。ネット上ではとても人気のある作品みただけ  
私の好みではなかったから。

誰かを攻撃したり、それに対して仕返しをしたり……そういう行為の繰り返しは、疲れるだけだ。  
もっと平和的な解決策はあると思う。もっとも、それだと物語は盛り上がりがないだろうけれど。

そんなことをつらつらと考えていた時、いつもの眩暈に襲われ、その場に倒れてしまった。  
意識が遠ざかる中、ふと、このまま死ぬのかもしれないと思う。

……まあ、いいか。

もう疲れきってしまった。起き上がる気力なんてない。

私は、充分頑張って生きたもの。

思えば、苦しい人生だった。

苦しい時間ばかりで、幸せな時間はちよこんとあるだけ。

もしも来世があるのなら、もっとまったり過ごしたい。幸せな時間を多く持てる、豊かな人生を  
過ごしたい。

そして私は目をつぶり……再び目を覚ますことはなかった。

——まったり過ごしたい。

その願いを抱えたまま、私は生まれ変わった。それも、死の直前に読んでいた短編小説の世界の  
登場人物に。

今世での私の名は、ローニヤ・ガヴィーゼラ。そう、悪役令嬢であった伯爵家の娘だ。

光のあたる角度によって淡いスカイブルーにも輝く白銀の髪と、青い瞳の持ち主。

この世界で初めて鏡を見た時、あまりにも西洋的な外見で、不思議な気分だった。自分じゃない  
みたいで、今でもあまり実感が湧かない。

外見の話はさておき、私が生まれたガヴィーゼラ家は、貴族の中でも大きな力を持つ家だ。王都  
の東南地区フィオーサンを管理していて、『王都東南の支配者』とも囁かれている。

跡継ぎは兄に決まっているけれど、私も伯爵令嬢として、物心がついた頃からさまざまな教育を受けてきた。

乗馬やダンスはもちろん、貴族の作法や社交界における決まりについても、頭に叩き込まれた。最初のうちは、貴族の家に生まれたのだから当然だと、必死に励んだ。

ただ幼心に、もう少しゆつくりする時間が欲しいと思った。もつと、ゆとりのある生活を送りたい。

七歳になった日、思い切って母親にそのことを話してみたら――

バチンッ！

――平手で頬を叩かれ、私の小さな体は絨毯の上に倒れた。

「なんて怠け者なの！ 本当にわたくしの娘!？」

母からそう罵られ、私は心の底から怯えた。

その場に居合わせた五歳上の兄までも、蔑むような眼差しで私を見下ろしていた。

……きつと、子どもらしく遊ぶ暇もないくらいお稽古に精を出すことが、貴族の普通なのだ。

ゆつくりする時間が欲しいなんて、言っては駄目なのだ。

けれど……私は今世でもこんな生活を送らなくちゃいけないのか。

これでは、前世の二の舞だ。

それなら、貴族なんてやめてしまいたい。今すぐこの家を飛び出してしまいたい。

そう思いながらも家を出なかったのは、幼い子どもが一人で生きていけるとも思えなかったから。それに、祖父の存在が大きい。両親と兄には温かみを感じなかったけれど、祖父はとても優しくかった。

祖母を病気で亡くしてすぐに、祖父は引退を決め、爵位を私の父に譲った。そして隠居生活を始めたのだが、貴族社会の中ではまだ影響力を持っている。

祖父は時折、私に会いに来てくれた。するとお稽古の時間はいつもより早く終わり、祖父と一緒にのんびりする時間をもらえた。

それは、せわしない私の日々の中で、唯一やすらげる時間だった。

ああ、いつそのことお祖父様に泣きついて、一緒に隠居生活をさせてもらいたい。

本気でそう考え始めた九歳のある日、私の結婚相手が決まった。

王弟殿下のご子息、シュナイダー・ゼオランド。

互いの利益のために、親同士が決めた縁談だ。

王弟殿下は公爵位を賜って臣籍に下ったけれど、王族に連なる方。そのご子息との結婚が決まった以上、私が祖父と隠居生活を送る道は閉ざされてしまった。

シュナイダーは私と同年。そしてゼオランド家の方々は、近い未来、私が美しい女性に成長す

ることを期待しているらしい。

私はその話を、顔に笑みを貼り付けたまま聞いていた。

つまり彼は、隣に見映えの良い女性を置きたいだけなのだろう。彼にとつて私は、お飾りに過ぎない。そして私は、そんな彼の期待に応えるべく、これからもお稽古に励まなければならないのだ。

一瞬、目の前が真つ暗になったけれど、よく考えてみたらここは小説の世界だ。

彼は将来、私と同じ学園に通い、ヒロインである男爵令嬢と恋に落ち、私に婚約破棄を突きつける。

そうだ、その運命を受け入れたら、私は自由になれる。

婚約破棄され、学園からも追放されるということは、もちろんガヴィーゼラ伯爵家からも追い出されるだろう。その時のために、事前に祖父にも相談して準備をしておけば……その後は、ゆつたりとした日々を過ごせるに違いない。

小説では、十六歳の時に婚約破棄をされた。

つまり、十六歳になるまでの我慢だ。我慢していれば、我慢さえしていれば、必ず……

私は祖父にもらった砂時計を見つめながら、自分にそう言い聞かせた。

硝子製のシンプルな砂時計には、緑色の綺麗な砂が入っている。まるでエメラルドかペリドットの宝石を砕いたみたいな砂は、美しい光をまといながら、サラサラと落ちていく。

その砂をじつと見つめていて、ふと思った。

本当に我慢するだけでいいのだろうか？

あと七年は、とても長い時間だ。砂時計にしたら、何度ひっくり返す必要があるだろう。あるいは七年の時をはかる砂時計を作ったら、どれほどの砂が必要なのだろう。

きらきらと輝く宝石のような砂を見つめながら、想像した。

……もつたない。

それほどの時間を我慢に費やすなんて、もつたない。

ならば、もう少し早く婚約破棄してもらおうのはどうだろう。

前世で読んだ小説の中にも、あったじゃないか。悪役として転生してしまった主人公が、運命を変えるためにあがく物語。

できることなら穏便に婚約を白紙に戻したいけれど、それは難しいと思う。だから、前世で読んだ小説の主人公みたいに、シュナイダーに嫌われるよう振る舞ってみよう。

そう心に決めたのに……

初めて会ったシュナイダーは、意外な言葉を口にした。

「親同士が決めた政略結婚だが、君と愛し合いたい。だから、一緒に愛を育もう」

まだ幼い彼は、大人顔負けの真剣な表情で、手を差し出してきた。

彼の言葉と態度に、私は目を丸くする。

彼が求めていたのは、お飾りの令嬢ではなかったのか。

真意を確かめるように彼の瞳を見つめると、優しく微笑んでくれた。

ああ、彼は嘘をついていない。政略結婚の相手としてではなく、ちゃんと愛し合うために、私を見ようとしてくれている。

——もしかしたら、この先待っているのは小説と同じ運命ではないのかもしれない。

何事もなく学園を卒業してシュナイダーの妻になり、仲の良い夫婦になる。

それは、決して悪くない未来だと思えてくる。

シュナイダーに愛してもらえる未来を想像すると……窮屈でせわしない貴族生活にも耐えられる気がする。

小さな期待が、芽生えた瞬間だった。

——まったりしたい。

ある日私は、ずっと抱えてきた願望をシュナイダーに打ち明けた。

彼は怒ったり呆れたりせず、「ローニヤは充分、頑張っている」と労いの言葉までくれた。嬉しくて嬉しくて、気が付くと涙が流れていた。

シュナイダーが我が家を訪問する日は、当然お稽古はお休み。彼は、王弟殿下——もといゼオランド公爵のご子息だもの。お稽古より優先すべき方だ。

彼がやってくると、私は人目がないことを注意深く確認しつつ、部屋のソファや庭の芝生でだら

んとした。

すると、彼は決まってこう言う。

「オレと会う時間をお昼寝に使わないでくれ、ローニヤ」

「……」

「……もう眠ったのか？ ローニヤ？」

「……スビー」

「寝たフリじゃないか！」

やれやれと呆れたように、肩をすくめるシュナイダー。けれど彼は、私がかくつるぐのを許してくれる。とても嬉しい。

一緒に過ごしている時は、他愛のない話ばかりをした。

好きなものや嫌いなもの。十二歳から入学する学園のこと、そこで学ぶ魔法のこと。

彼と過ごす時間は決して長くはなかったけれど、穏やかに温かに過ぎていった。

シュナイダーと会う時には、手作りのお菓子を用意して私がコーヒーを淹れている。

そうするようになったのは、ある出来事がきっかけだ。

その日、私とシュナイダーは伯爵家の一室で、いつものようにのんびり過ごしていた。ただし、護衛も兼ねた世話係の青年が控えているから、あまりだらしない姿は見せられない。



私は青年の淹れてくれたコーヒーに手を伸ばした。けれどそのコーヒーは味が濃すぎて、私の口には合わなかった。とはいえ、淹れ直してもらうのも申し訳ない。だから私は、自分で淹れ直すことにした。すると――

「もつ、申し訳ございませんっ……ローニャお嬢様!!」

世話係の青年が真つ青になって頭を下げる。

「いいえ、謝らなくとも私は――」

「申し訳ございません!」

「……」

私の言葉を遮って謝罪する青年に、私は困惑する。別に怒っているわけじゃないのに。

「ほ、他の方々のようにうまくできず……本当に申し訳ございません」

青年はそう言って跪く。

他の方々というのは、他の使用人達のことだろうか。そういえば、ガヴィーゼラ家の使用人は完璧な者ばかりだ。それもあり、彼は緊張してうまく仕事をこなせていないのかもしれない。

震えながら謝り続ける青年の前に、シュナイダーは哑然としていた。

「……ローニャ、まさか君は他人に厳しいのか?」

「違いますわ、シュナイダー」

どちらかというと、私は他人にも甘いと思う。

何はともあれ、使用人の青年は責任を感じすぎてしまう人だったらしい。私が余計なことをしたばかりに、申し訳ない。

その後、青年はガヴィーゼラ伯爵家を辞めてお詫びをするとまで言い出した。そんな彼を止めることはできなかつたけれど、こっそり祖父に頼み込み、祖父の家の使用人として雇い直してもらった。

一方の私は、この出来事を機に、自分でコーヒーを淹れるようになったのだ。

せっかくだからお菓子も作ってみたいと思い、ガヴィーゼラ伯爵家の料理人に作り方を教わったりもした。

そんな私を見て、家族は眉をひそめていた。けれどシュナイダーが「オレが頼んだのです」とフォローしてくれたおかげで、彼が来ない日にもお稽古以外の時間を持てるようになった。

決して蔑ろにはできない婚約者様が望んでいるのだから、家族だって無下にはできない。

コーヒーや紅茶の淹れ方、お菓子の作り方を学び、試行錯誤する。その時間は私にとって、とても楽しいものだった。

そして私が振る舞う飲みものとお菓子を、祖父もシュナイダーも気に入ってくれた。

やがて私とシュナイダーは十二歳になり、エリートが集う学園――サンクリザンテ学園に入学した。



貴族の子息令嬢は、皆その学園に通う。

入学の少し前から、私には鬼軍曹のような家庭教師がついた。そして血反吐を吐きそうなほど勉強をさせられ、結果、入学後の試験では女子で学年一の成績をおさめた。

その後の試験でも、私はずっと一位を維持している。

けれど、家族はそのことについて何も言わなかった。むしろ、一位以外はありえないと思ってるらしい。両親も兄も、学園で一位を取ったことなんてないのに。

それでも、一位から転落すれば、ガヴィーゼラ家の恥さらしと罵倒されるに違いない。家族が私に向ける目は、そう物語っていた。

二年生になると、私は寮生活を始めた。学園を首席で卒業するため、寮で学業に励みたいと家族を説得したのだ。

学園では、ひたすら勉学に励む日々を過ごした。

学園での授業に加え、母親から課せられたさまざまなお稽古もある。前世の学生時代より忙しかったが、厳しすぎる家族と顔を合わせずに済む分、心に余裕ができた。魔法の授業はとても楽しいし、寮生活にも満足していた。

それに、シュナイダーとも良い関係を築けている。

ある日の穏やかな昼下がり。

暖かい陽が射す温室の庭園で、私とシュナイダーはベンチに並んで座っていた。香り豊かなコーヒーを楽しんでいると、シュナイダーが真剣な表情を浮かべた。

「ローニャ」

きらびやかな金髪に、アーモンド型の青い目。彼は、おとぎ話に出てくる王子様のようにかっこいい。

シュナイダーは私の手からコーヒーカップを取りテーブルに置くと、ギョツと両手を握りしめてきた。

「キスをしよう」

熱を帯びた青い瞳で見つめられ、私は一瞬呆けてしまう。

——親同士が決めた政略結婚だが、君と愛し合いたい。だから、一緒に愛を育もう。

シュナイダーはその言葉の通り、私のことをとても大切にしてくれた。

やがて私達は手を繋いだり腕を組んだりするようになり、最近はその甲や頬にキスをされるようになった。

けれど……今、シュナイダーが求めているのは、唇へのキスだ。

「それは……卒業後にしようって決めたはずでしょう？ 私達はまだ十三歳よ」

「キスだけだ。嫌か？」

彼の真摯な眼差しに、心が揺れる。

シナリオ通りの未来が訪れるのだとしたら……拒むべきだと思う。

だけどシユナイダーは、こんなにも私を見てくれて、愛そうとしてくれている。そんな彼を信じたい気持ちもあった。

シユナイダーが、私をハッピーエンドに導いてくれる。

私はそう信じて、彼のキスを受け入れることにした。

一度深呼吸をして、ゆっくりと目を閉じる。

想像以上に緊張した。心臓はバクバクと高鳴り、体は強張っている。

「ローニャ……愛してる」

シユナイダーの唇と私の唇が重なる。

そつと臉を上げると、少し頬を赤らめて満足そうに微笑むシユナイダーの顔が目映った。私は彼に微笑み返す。

——それは、奇跡があると信じていた私の初恋で、ファーストキスだった。

十四歳になり、学園での生活はますます忙しくなった。

私とシユナイダーは三年生。六年生で卒業するから、ちょうど折り返し地点だ。

貴族の子息令嬢が六年間を過ごすサンクリザンテ学園は、街の中心地に建っている。さながら純白の宮殿のように美しい建物で、王城からもほど近い。王都の建物は、王城と学園を囲むように建

てられていた。

寮と学園を往復するばかりだった私の生活は、少しずつ変わり始めている。王城で開催されるパーティーへの招待が増えたのだ。

王城でのパーティーに参列する時は、もちろんシユナイダーと一緒に。

きらびやかな会場で、彼とともに挨拶をして回る。すると決まって、『サンクリザンテ学園始まって以来のエリートカップル』だと褒めそやされた。

シユナイダーも私も、学園に入学してから学年一位の成績を維持しているのだ。

けれど……家族は、私のことを絶対に認めてくれない。

パーティー会場では、家族と顔を合わせることもあった。彼らは、周囲の人々から褒められる私を見ても、無表情だ。

両親は「当然だ」と言い、兄は「女子生徒の中で一位を取ることなど簡単だろう」と吐き捨てる。

そんな中、引きつった笑みを浮かべる私に、シユナイダーは言う。

「君は偉業を成し遂げた。誇っていいんだよ、ローニャ」

彼は、いつも私を優しく励ましてくれた。だから私は、穏やかな気持ちを取り戻して微笑みを返す。

シユナイダーが理解してくれるなら、それでいい。それだけでよかった。

十五歳になると、シュナイダーとの結婚の話が具体的に進み始めた。

シュナイダーの強い希望もあり、私達は卒業後すぐに結婚をすることとなったのだ。それまでは学園で、カプルとして扱われていた私達。

けれどシュナイダーは私をはつきりと婚約者と呼ぶようになり、周囲もそう扱うようになった。そんな中、ついにその日がやってきた。

シュナイダーが、小説の主人公ヒロインと出会う日。

もしかしたら小説のような結末にはならないのかもしれない。そう思っていた私だけれど、彼は彼女と出会ってしまった。

男爵令嬢ミサノ・アロガ。

美しい黒髪と、黒い瞳を持つ美人。群れることを好まない、孤高なタイプの女子生徒だ。

シュナイダーは、授業を通して彼女とペアになった。

気さくな彼らしく、ミサノ嬢に積極的に話しかけて、あつという間に打ち解けた。

ツンとした表情が多いミサノ嬢だが、シュナイダーとはやわらかい表情で話をしている。

小説通り、ミサノ嬢は彼を好きになったのだろう。

シュナイダーは、はつきり言ってモテる。

なんでもそつなくこなすし、王弟殿下の息子ながら驕むだったところもない。周囲からの信頼も厚く、皆から好かれていた。

一方の私は……仲の良い友人が少しいるくらいで、皆から好かれているわけじゃない。

そして勉強漬けな日々の中、隙あらば休んでらんとしている。

シュナイダーはそんな私にちよつと呆れていたけれど、いつも甲斐甲斐しく世話を焼いてくれた。時には、眠ってしまった私を横抱きにして運んでくれることもある。

いつも優しく、私を理解しようとしてくれるシュナイダー。

けれど、彼は少しずつ変わっていく。

私達は、十六歳になった。

小説で、私が婚約を破棄され、学園から追放される年だ。

大丈夫、きっと大丈夫。

そう思っていたものの、不安はちよつとずつ膨ふくらんでいく。

この頃は、授業以外でもシュナイダーとミサノ嬢が一緒にいるところをよく見かける。ただ、シュナイダーは私を見つけると、すぐに会話を切り上げてこちらに来てくれた。そのたびに、ミサノ嬢から睨にらまれる。

もともと彼女は、私をライバル視していたらしい。

ミサノ嬢は入学以来、女子で学年二位を維持している。家庭教師はついておらず、学園の授業と自身の努力のみで頑張っているようだ。事実、彼女は才能に溢あふれていて魔法の腕も良い。

おそらく私より彼女のほうが優秀なのだと思う。けれど私は、学園に入学する前から鬼軍曹おにぐんそうのよ

うな家庭教師にしごかれてきた。その貯金もあり、今のところ女子の学年一位は私だ。

彼女にとつて私は、ただでさえ目障りなのに、想い人の婚約者でもある。ますます嫌いになつたっておかしくない。

私は、あまり彼女を気にしないように過ごしていた。

大丈夫。シュナイダーの心にいるのは、私だから。

——ある日、私は重い本を何冊も抱えて学園の廊下を歩いていた。授業で使用した資料を図書室まで返しに行くところだ。

そして階段に差しかかった時、廊下を駆けていく生徒とぶつかりそうになり、思わず本を落としってしまった。

重い本は鈍い音を立てて床に散らばり、そのうちの一冊が階段から落ちていく。

私は慌ててその本を追いかけ、階段を下り切ったところで拾おうとした。……するとそこには、ミサノ嬢が立っていた。

落ちていく本に気を取られて気が付かなかったが、あやうく、彼女に本がぶつかってしまったところだった。

彼女は険しい表情を浮かべている。

私は申し訳なく思いつつ、令嬢スマイルを浮かべる。

「ごめんなさい。わざとじゃなくてよ」

貴族令嬢としての対応は、これで間違いない。でも、ミサノ嬢はキツとこちらを睨み付けた。

……少し鼻につく言い方だっただろうか。

もしかするとミサノ嬢は、私がシュナイダーと彼女の仲を妬んで嫌がらせをしたと思っているかもしれない。

もう一度謝ろうか迷っているうちに、彼女はそっぽを向いて立ち去ってしまった。

——そして別の日。

魔法の授業の最中に、ある生徒が魔法を暴走させた。

「ローニャー！」

バチバチと嫌な音を立てる魔力の塊が私に向かって飛んでくる。

こちらに駆け寄ろうとするシュナイダーを横目に、私はその魔力の塊を魔法で撥ね返した。すると魔力の塊は、運悪くミサノ嬢のすぐそばで弾けた。危うくミサノ嬢に当たるところだった。

私はまたも睨まれてしまう。

……わ、わざとじゃなくてよ。

魔法を暴走させた生徒はこっぴどく叱られ、その後は普通に授業が進められた。

そして最後に魔法対決することになったのだけれど——私の対戦相手はミサノ嬢だった。

成績がかかっているので、私は全力を出して彼女に対峙する。

結果は私の勝利。ミサノ嬢は、ものすごい形相でこちらを睨んでいた。  
……こ、これはしょうがないでしょう？  
ちなみに、これらの出来事はすべて小説に描かれていた内容と同じ。  
つまり、私に悪意なんてこれっぽっちもないのに、ミサノ嬢への嫌がらせになってしまったのだ。  
私が何もしなくても、小説の結末に向かっていつているような気がする。  
不安は、どんどん膨らんでいった。

『王都東南の支配者』ガヴィーゼラ伯爵家の一人娘となれば、さまざまな人達が寄ってくる。そのうえ私は、王弟殿下のご子息と婚約している。

友人と呼べる人は少ないものの、私には取り巻きの令嬢が多かった。彼女達は、よく私をお茶に誘ってくる。いつの間にか、学園内に私専用のお茶会スペースまで用意されていて、驚いたほどだ。今日も、何人かの令嬢に誘われて、そのお茶会スペースにやってきた。

吹き抜けの空間の一階に作られた、サロンのようなスペース。そばには螺旋階段があり、二階、三階の渡り廊下に繋がっている。

本当は一人でのんびりしたいけれど、将来のことを考えると、彼女達との交流も重要だ。窓から優しい陽射しが入る部屋で、私は飲みものとお菓子の準備をする。

初めは私がお茶の準備することに恐縮していた令嬢達も、今では慣れっこだ。

「ご令嬢達は、流行りの紅茶を好む。私は彼女達に紅茶を振る舞い、自分にはコーヒーを淹れた。  
「ねえ、ローニャ様。ミサノ嬢のことなのですけれど、最近シュナイダー様に馴れ馴れしくありません？」

「ローニャ様、彼女には一度、身の程を教えて差し上げるべきではなくて？」  
今日の話題は、ミサノ嬢について。

穏やかな昼下がり、美しく着飾った令嬢達は、優雅な仕草で紅茶を楽しみ、美しく微笑んでいる。なのに、彼女達の口から零れ落ちたのは、とても物騒な言葉だ。

「きつとミサノ嬢は、シュナイダー様を奪おうと目論んでいるのですわ。ローニャ様、早々に釘を刺しておきましょう？」

可愛らしく微笑みながらそう提案してくる令嬢に、私は微笑みを返した。  
「そんな必要、ありませんわ」

私が答えると、令嬢達は感心したような表情を浮かべる。

「まあ。ローニャ様は、いつも冷静でいらっしやるのね」

「本当、素敵ですわね」

「ねえ、それより今日の紅茶も美味しいですわ」

「ええ、このお菓子も」

すぐに話題が変わったことにホッとす。けれど次の瞬間――

頭上から黒い物体がポトポトと落ちてきた。

「きゃあっ!!」

令嬢達は口々に悲鳴を上げる。

テーブルの上の黒い物体をよく見ると、それは拳大ほどの蜘蛛だった。

「いやああ!!」

令嬢達は、青ざめた表情で慌てふためいている。

一方の私は、まったく平気。黒光りするイニシャルGの虫以外は、怖くない。

むしろ目の前にいる蜘蛛達は、ぷっくりした体とクリンクリンした目が可愛い。

ふと上を見上げると、二階の渡り廊下にミサノ嬢の姿を見つけた。

彼女は勝ち誇ったような表情で去っていく。

……犯人は、彼女か。

やがて令嬢達も、バタバタとこの場からいなくなってしまった。よほど蜘蛛が怖かったらしい。

コーヒーを啜りながら蜘蛛達を観察していると、背後から爽やかな声が聞こえた。

「やあ、ローニヤ嬢! 今日のお茶会は一人かい?」

振り返った先にいたのは、ヘンゼル・ライリー。サラサラと揺れる長い金髪を、後ろで一つに束ねている。

ライリー家は手広く商売を営んでおり、その成功によって数年前に男爵位を得た。

ヘンゼルはライリー家の長男で、父親の仕事を手伝いながら商売の勉強をしつつ、この学園で貴族としての振る舞いも学んでいる。

無邪気な性格で、誰にでもフレンドリーに接するヘンゼル。

彼はシュナイダーの良き理解者であり、私の数少ない友人の一人だ。

ヘンゼルは私のコーヒーを気に入れてくれていて、時々飲みに来てくれることもある。

私にはもう一人、大切な友人がいるのだけれど……彼女は五年生に進級したと同時に、休学してしまった。国外で仕事をされているご両親に、付いていくことになったのだ。

一人でお茶会をしているのか、というヘンゼルの問いかけに、私は曖昧な笑みを返した。

すると彼は、テーブルの上に目を向ける。

「……蜘蛛? 風変わりなお茶会を試しているところかい?」

翡翠色の目を見開き、首を傾げているヘンゼル。

「可愛いでしょう?」

私は笑ってそう誤魔化した。

天然な彼も深くは追及せず、「そうだね」と笑い返して向かい側の椅子に座る。

私はヘンゼルのために、コーヒーを一杯淹れた。

「んー、ローニヤ嬢のコーヒーは最高だ。ねえ、これで商売する気はないのかい?」

「お金を取るほどのものではないですわ」

「いやいや、オレならお金を払ってでも飲みたいよ」

ヘンゼルは、にっこりと笑って言う。その人懐っこい笑みから、彼がお世辞ではなく本心で言っているのだと伝わってきた。

だから私も、心からの笑みを返す。

——確かに、こんなふうにコーヒーを淹れるお仕事なら、是非ともやってみたい。

令嬢なんてやめて、こちんまりとした喫茶店を開くのはどうだろう？

それなら、今よりまったりできそうだ。

ぼんやりそんなことを考えていると、ヘンゼルがいつもより静かなことに気が付いた。常ならば、楽しい話題を次から次へと話してくれるのに。

「……ヘンゼル様？」

彼は、テーブルの上をじっと見つめている。そこには、飲みかけの紅茶や食べかけのお菓子があつた。先ほどの令嬢達のものだ。

ヘンゼルは、優しい眼差しをこちらに向ける。

「ローニヤ嬢、オレのことはヘンゼルでいいよ。……それより、この蜘蛛。もしかして……嫌がらせかい？」

「……」

私はとつさに目を逸らす。

「大丈夫なのかい？」

ヘンゼルは、心配そうな表情を浮かべてこちらを覗き込んでくる。だから私は、にっこりと笑ってみせた。

「……可愛い蜘蛛ですわ」

けれど、ヘンゼルは浮かない表情のままだ。

彼は、私の手によじのぼってきた蜘蛛を、そつと手に取った。

「確かに可愛い蜘蛛だけど……何かあつた時には、シュナイダーを頼るんだよ？」

「……心配してくれてありがとう、ヘンゼル」

私が礼を言うと、ヘンゼルはようやく笑い返してくれた。

その夜のこと。

寝支度を済ませた私のもとに、シュナイダーが訪ねてきた。

「ローニヤ……君がミサノ嬢に嫌がらせをしているというのは本当かい？」

彼に尋ねられて、私はハツとする。

そういえば、小説にもこんなシーンがあつた。ミサノ嬢は、ローニヤに嫌がらせをされたから反撃したとシュナイダーに自ら話す。シュナイダーは驚き、ローニヤに真意を確認して必ず彼女を止めるとミサノ嬢に約束するのだ。



「……シュナイダー。私が誰かに嫌がらせをするはずないでしょう？」  
そう答えると、シュナイダーは納得のいかないような顔で口を開く。

「最近ミサノ嬢と親しくなったが、オレは浮気をしているわけではないぞ」

「……わかつています。嫉妬して、ミサノ嬢に嫌がらせをすることなんてありませんわ」  
「しかし、君は……以前、護衛を辞めさせたこともあるし……」

なおも食い下がるシュナイダーに、私はシヨックを受けた。

彼の言う護衛とは、我が家を辞めて祖父の家で働いている青年のことだ。あれは私が辞めさせたわけではないのに……

「……彼は、責任を感じすぎて辞めてしまっただけですわ」

「……」

シュナイダーは、戸惑っている様子だった。

私のことを疑っているのだろう。些細なことで、他人にひどい仕打ちをする令嬢なのかもしれない。

長い間、一緒に過ごしてきたのに、私のことを誰より見てくれていたのに……彼は今、疑心を抱いている。

「……信じて、シュナイダー」

私は両手で彼の頬を包み込み、祈るように告げた。

「ミサノ嬢の誤解よ、私は嫌がらせなんてしていませんわ。お願いだから信じて」  
するとシュナイダーは肩の力を抜き、ようやく笑みを見せてくれた。  
「信じるよ……ローニャ」

——けれど、私にはわかってしまった。

今は信じてくれているけれど、シュナイダーの心は私から離れていく。

初恋が色褪せていくのを、感じた。希望が、絶望の色に染まっていく。

一人になった部屋の中で、私は祖父にもらった砂時計をひっくり返した。緑色の砂は、宝石のようキラキラ輝いている。

落ちていく砂を眺めながら、ぼんやりとする。

その時ふと、ごんまりとした喫茶店を営む自分の姿が浮かんだ。

……運命を受け入れる準備を始めよう。

幸せな初恋の時間は、もう終わり。

九歳の頃、この砂時計を見つめながら、七年はとても長い月日だと考えていた。けれど、今思えばあつという間だったかもしれない。

やがて美しい砂は、すべて下に落ちてしまった。私は砂時計をひっくり返すことなく、明かりを消して瞼を閉じたのだった。

## 2 役目の終わり。

幸せな時間の終わりを感じた日の翌日。

私は祖父に会いに出かけた。彼は、王都の隅っこにあるお屋敷で、ひっそりと暮らしている。

「ロナードお祖父様」

「ローニヤ、来てくれて嬉しいよ」

胸に飛び込めば、祖父は両腕で優しく抱きしめ返してくれる。

祖父は居心地の良さそうな居間に私を案内し、チェアに腰かけた。私は祖父の足元に座り込み、近況報告をする。

新しく覚えた魔法、最近読んで面白かった本の内容、そして契約した精霊のこと。

この世界には精霊や聖獣、幻獣、妖精がいる。彼らは人間に『頼みごと』をしてきて、それを叶えようと力を貸してくれる。頼みごとの内容はさまざまだ。

彼らと契約すると、力を貸してほしいとこちらからお願いできるようになるし、逆に彼らの頼みごとを叶える場合もある。

ちなみに契約というのは思いのほか簡単にできるもので、貴族の多くは、一度は精霊と契約した

ことがある。というのも、サンクリザンテ学園で昔から行われている試験に、魔法契約の試験があるのだ。

一度契約をすると、精霊達は気ままに頼みごとをしてくる。何かと忙しい貴族達がそれらすべてを叶えるのは難しく、試験が終わると、ほとんどの貴族は契約を破棄してしまう。

けれど、私は契約を破棄しなかった。

幸いそこまで多く頼みごとはされなかったので、契約している精霊とはいい関係を築けている。

「……ローニヤ。何か頼みたいことがあるんだろう？」

おもむろに、祖父がそう切り出した。

温かい微笑みを浮かべて、私を促すように首を傾げる。

……お祖父様には、バレバレだったみたい。私は、おずおずと口を開いた。

「もし……シユナイダーに婚約破棄されたら……私はガヴィーゼラ家を追い出されますよね？」

祖父の膝に手を置いて、なるべく明るい口調で問いかける。

「シユナイダー君と、うまくいっていないのかい？」

心配そうな表情を浮かべた祖父に、私はゆっくりと頷く。

「……だめになると思うの」

そんなつもりはなかったのに、思いのほか沈んだ声になってしまった。

「シユナイダーのためなら、頑張れるって思っていたけれど……きつと、だめになるわ」

シュナイダーが認めてくれたから、サンクリザンテ学園でも頑張れた。

シュナイダーが褒めてくれたから、前向きになれた。

シュナイダーが支えてくれたから、今まで耐えられた。

けれど――

「……助けてください、お祖父様。私は、どこか遠くでまったりと生活したいのです」

少しの間、まるで考え込むように私の髪を撫でていた祖父は、やがて静かに頷いた。

「わかった、ローニャ」

しわしわの優しい手が私の頬に伸びる。

ああ、良かった。お祖父様は私の声に応えてくれた。

唯一、温かく愛してくれる家族。唯一、私が愛している家族。

「ありがとうございます、お祖父様」

――その後、祖父は古い伝手を使い、こぢんまりとした家を見つけてくれた。国外れの街に建つ、素敵な家だ。

私はそれまでずっと貯めていたお金を渡し、祖父の名義でその家を購入してもらった。

そして学園での暮らしを続けながら、喫茶店について学び始めた。経営については、何気なさを装いつつヘンゼルに教えてもらう。材料の仕入れ先について調べたり、コーヒ―の淹れ方や料理の仕方を改めて学んだり……

「最近、いろんなお菓子を作ってくれるね！ 美味しいよ！」

「ありがとう、ヘンゼル」

ヘンゼルが頬張っているのは、メープルシロップをかけたクロワッサン。甘さ控えめの、コクの深いラテと一緒にいただく。

この頃、お茶会スペースにやってくるのはヘンゼルだけ。

取り巻きの令嬢達は、蜘蛛投下事件を機に、ミサノ嬢への反撃で忙しいみたい。彼女達を止めようとしたのだけれど、結局うまくいかなかった。

それだけじゃなくて……最近シュナイダーも私のそばに来ない。

でも、私はそれに気付かないふりをした。

――やがて、お茶会スペースにはヘンゼルも来なくなった。父親の仕事の手伝いで、しばらく休むことになったのだ。

もう一人の友人も休学中。

私は、ついに一人となってしまった。

この学園に、私の居場所はない。一人でお茶を飲みながら、そう実感したのだった。

この頃、シュナイダーはいつもミサノ嬢と一緒にいる。

私の取り巻きの令嬢達がミサノ嬢にいろいろと嫌がらせをしたらしく、それを阻止するために一

緒にいるという。

ミサノ嬢は、とても嬉しそうだった。シュナイダーも、心から楽しそうな笑みを浮かべている。その時、私は気付いてしまった。

私は確かにシュナイダーのことが好きだったけれど、ミサノ嬢のように彼に好意を向けたことはなかったように思う。

彼に守られて、それに甘えてきた私。

ただ今は自分の未来を考えて、彼から離れる準備をしている。

愛は、一人が心を注いでいるだけでは保てない。二人が支え合っていかなくちやいけないものなのだ。

私は、シュナイダーに支えてもらってきた。でも、シュナイダーを支えようとはしなかった。そして未来のことを一人で決めて、勝手に手を離そうとしている。

……もう、彼とはさよならだ。

ミサノ嬢を攻撃しようと思ったことなど一度もないが、ミサノ嬢の視点では違っていらしい。彼女の中では、ストリーが決まっていたみたい。

蜘蛛投下事件を機に反撃してきた令嬢達を捕まえ、容赦なく拷問したそうだ。もちろん、周りの生徒達には気が付かれないように。

ミサノ嬢の拷問は、肉体を痛め付けるような拷問ではない。おぞましい虫によりひどい目に遭う幻覚を見せ続けるのだ。

令嬢達は、泣き叫んで許しを乞うた。けれどミサノ嬢は、『望む答え』を彼女達が口にするまで許さなかったのだ。

結果、令嬢達は口をそろえて言った。私に指示されて、ミサノ嬢に嫌がらせをしていたのだと。もちろん、それは真実ではない。だけどそれを指摘する人はいない。

こうしてミサノ嬢の視点では、小説通りのストリーが進んでいった。

——やがて迎えた、運命の日。

私はミサノ嬢に呼び出され、学園の広間にやってきた。

広間は学園集会にも使用されるため、とても広々としている。

私は、一階にある壇上に立っていた。目の前にいるのは、ミサノ嬢と私の取り巻きの令嬢達。そしてシュナイダーだ。

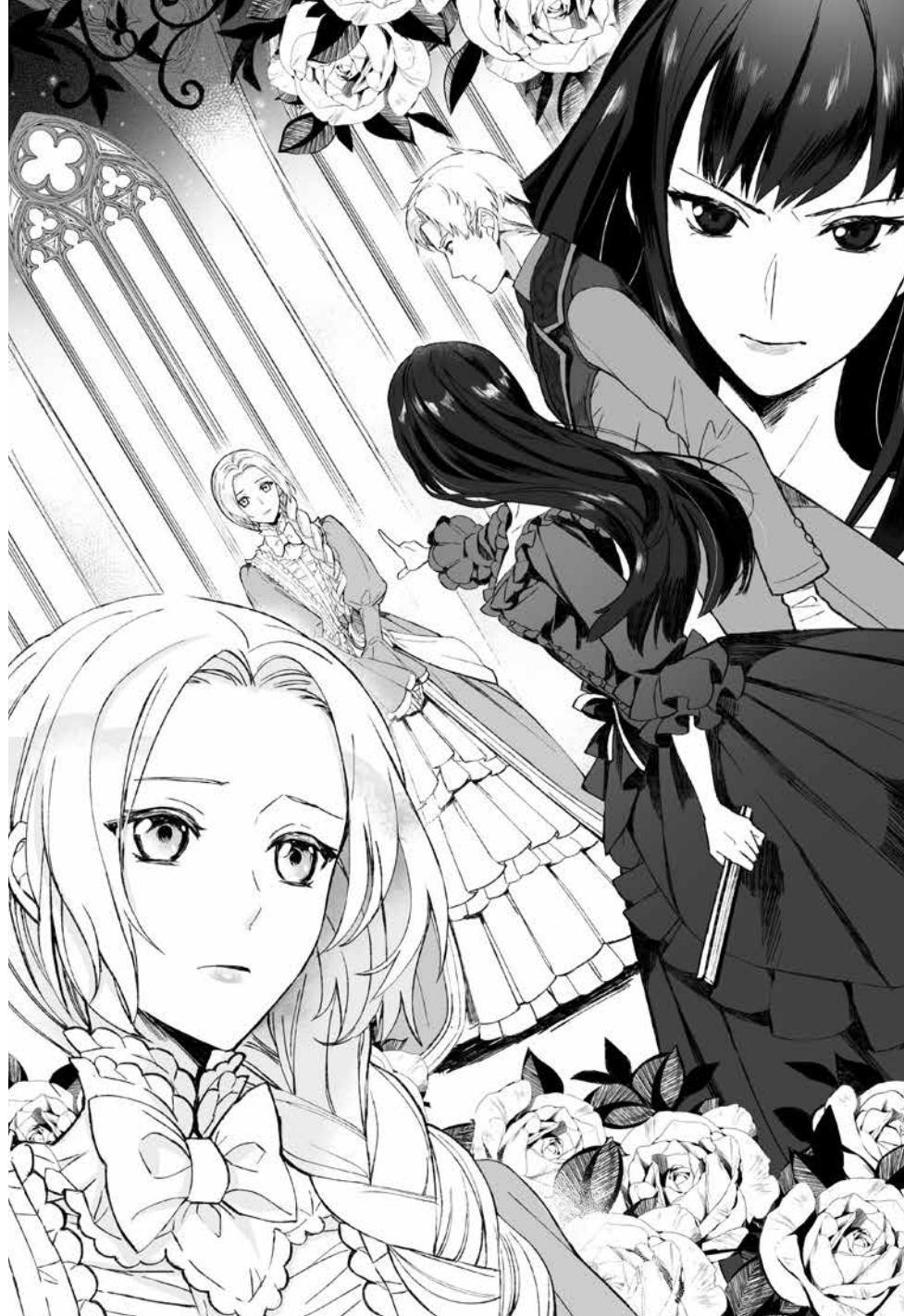
壇上の前に設けられたスペースには多くの生徒達が集まり、二階席にもその姿が見える。

これから、私の公開処刑が行われるのだ。

「ローニャ・ガヴィーゼラ嬢。あなたの悪事、暴かせていただきます」

ミサノ嬢は、力強くそう宣言した。

真つ赤なドレスを身にまとい、射抜くような眼差しでこちらを見据えている。



赤は、勝利を象徴する色だ。

おそらく彼女は、勝利を確信しているのだろう。

彼女に悪事を暴かれれば、この学園にはいられなくなる。加えて、貴族社会にも居場所なくなるに違いない。仮にそれが無実の罪であっても。

両親と兄は、私を切り捨てる。ガヴィーゼラ家とは、そういう家族だ。

ミサノ嬢は、そこまで考えていないのだと思う。

けれどシュナイダーならば、ガヴィーゼラ家のことをわかっているはずなのに……

ミサノ嬢が私の罪を糾弾している間、私はシュナイダーをじっと見つめていた。

彼は、私に嫌悪の眼差しを向けている。私を咎めるような、幻滅したような視線だ。今まで向けられたことのない視線に、心が軋む。

「……身が覚えがございません。濡れ衣ですわ」

口からすんなりと出たのは、小説と同じ台詞だった。

ミサノ嬢は、取り巻きの令嬢達に向き直る。

「証拠がありません。そうでしょう？」

「は、はい……すべてはローニヤ様の指示です」

「ガヴィーゼラ家の伯爵令嬢には、逆らえませんっ」

口々に言う令嬢達。

私に責任を負わせれば、彼女達の罪は軽くなる。彼女達は、決して私と目を合わせようとしなかった。

眉をひそめたくなくなったけれど、私はそれも受け入れることにした。

そもそも、私だって彼女達を信用していたわけではないもの。私達の間には、信用や信頼関係はないのだ。

「愛ゆえに嫉妬に狂ったと、潔く認めるべきですよ。ローニヤ嬢」  
勝利を確信したように、ミサノ嬢は笑みを浮かべる。

彼女からしたら、私は悪なのだ。そして、彼女こそが正義。

「——見損なっただぞ、ローニヤ」

シュナイダーが一步踏み出して、口を開いた。

「君とは結婚できない。婚約は破棄させてもらう！」

言い渡される、最後の言葉。

シュナイダーの目の前に、金色の光に包まれた、一枚の紙が現れる。

そして次の瞬間、私の目の前にも同じ紙が現れた。

これは、魔力を使ってサインした魔法の契約書。私とシュナイダーの婚約に関する契約書だ。

シュナイダーが手を振ると、二枚の契約書が引き裂かれた。それらはびりびりに破かれ、金色の光とともに薄れて消えていく。

私は、黙ってシュナイダーを見つめた。

今の彼に「私を信じて」と言ったら、どんな言葉を返されるのだろうか。

ずっと寄り添ってきたのに、私のことを誰よりも知っているはずなのに、信じてほしいと伝えたのに。

彼は、ミサノ嬢の言葉を信じて、私の言葉を信じなかった。

小説通りの展開。これが運命。

私の初恋は、絶望の色に染まりきってしまった。

広間にいる生徒達が、私に罵声を浴びせる。そんな中、ミサノ嬢はシュナイダーの胸に飛び込んだ。シュナイダーもまた彼女を受け止める。

「シュナイダー！」

「ミサノ」

生徒達は、二人に祝福の拍手を贈る。

シュナイダーは、ミサノ嬢を抱きしめたまま私を睨み付けた。

彼はこれから、ミサノ嬢を守っていくのだ。かつて私を守ってくれたように。

きっと二人は、良いカップルになる。運命で結ばれているのだから。

「……幸せになってください」

私はさよならの代わりに、微笑んで告げる。

ずっと私のことを甘やかしてくれた、シュナイダー。今まで支えてくれた彼のことは、嫌いな  
どなれなかった。今までの感謝も込めて、二人を心から祝福したい。

シュナイダーには、私の言葉が聞こえていたようだ。

それまで険しい表情をしていた彼は、別の感情を顔に浮かべようとしていたけれど――

その変化を見る前に、私は一人、歩き去る。

次第に遠ざかる拍手の音を聞きながら、私は初恋にお別れを告げる。

シュナイダーに愛を育はぐもうと言われ、希望の光が灯った瞬間。

ファーストキス。

寄り添って、甘やかしてくれて、支えてくれた初恋の人。

――さようなら。

彼がいなければ、令嬢生活に耐えられなかった。息もつけないほど多忙な日々、彼は安らぎと  
休息を与えてくれた。

両親にも兄にも認めてもらえない、苦しくて息の詰まる日々。

そんなガヴィーゼラ伯爵令嬢の生活から、ついに逃げ出せる。

学園の廊下を歩く私の歩調は、次第に速くなっていく。最後には走って学園を飛び出した。

自由だあー!!

勢いがつきすぎて、学園の玄関扉から続く長い階段を飛び下りる形になる。

でも、大丈夫。階段の下には、私を受け止めてくれる人がいる。

「ロ、ローニャお嬢様!? お怪我はありませんか!？」

「お迎えありがとう、ラーモ!」

彼は、私の元護衛兼お世話係の青年。今は、お祖父様じいさまのもとで護衛として働いている。

名前はラーモ。深い紺色の髪と、アーモンド型の目の持ち主だ。

細身ながらも、私をしっかりと受け止めてくれた。

ラーモは、私を抱きかかえたまま馬車に乗せてくれる。

ミサノ嬢に呼び出された時点で、『結末』はわかっていた。だから祖父に、お迎えを頼んでおい  
たのだ。荷物も、すでに馬車に載せている。

馬車の中で、私はニコニコしていた。もう学園を振り回らない。

心残りは、二人の友人に別れを告げられなかったこと。

二人は、あの場にはいなかった。だから、魔法で手紙を送ろう。学園を出た今、心からホッと  
していること、これから願いを叶えられるのが楽しみなことを伝えたい。

……そう。私は、念願のまったり生活を始めます! ひゃっほーい!!

喜びが抑えきれず、思わず両腕を突き上げる。その瞬間、馬車の揺れに負けてパタンと倒れてし  
まった。

すぐに起き上がり、姿勢を正してコホンと咳払い。



落ち着きましよう。

ひゃっほーいと小躍りするの、やめておきます。

馬車の中で足をゆらゆら揺らしながら、私は鞆かばんを引き寄せた。その中から、例の砂時計を取り出す。

そっとひっくり返せば、緑色の砂がキラキラ落ちていく。

苦しい人生だった。

苦しい時間ばかりで、幸せな時間はちょこんとあるだけ。

これからは、もっとまったり過ごしたい。幸せな時間を多く持てる、豊かな人生を過ごしたい。その願い、叶えに行きます！

## 第2章 ❖ まったり喫茶店。

### 1 喫茶店の開店。

朝陽を浴びて、清々すがすがしい気分起床する。シングルベッドから下りたら、ゆっくと背伸び。ベッドのシーツを整えたあと、すぐそばにある浴室で顔を洗い、歯磨きをする。

浴室から出た私は、新しい部屋を見渡した。ベッドの他には、ブラウンの机と、窓際に置いたグリーンソファがあるだけ。私は窓を開けて空気を入れ換え、深呼吸した。

それからクローゼットを開けて、一着のドレスを取り出す。今まで着ていたドレスは装飾が多く華やかだった。でもこれからは、質素なドレスだ。

飾りもスカートのボリウムも控えめで、とても動きやすい。ただ、腰回りはコルセット風のデザインになっている。今までぎゅうぎゅうに締めていたから、なくなってしまうのも違和感がある。私はドレスの腰回りにあしらわれた紐を軽く締めた。

クローゼットに備え付けられた鏡を見ながら、髪を梳とかす。

スカイブルーをまとった白銀の髪は、少し癖があつて波打っている。私は髪をサイドに集めて、

緩い三つ編みに仕上げた。リボンのついたゴムで留めて、肩から垂らす。

「……いらっしやいませ」

笑みを作って、接客の練習をしてみた。うん、これからは令嬢スマイルが役に立ちそうだな。

今日は、待ちに待った喫茶店の開店日。

ガヴィーゼラ家の娘として学んできたことは、これからきつと私の役に立つだろう。

ここは王都から随分離れているけれど、街は活気に溢れている。私のお店は、他のお店や家の建ち並ぶ通りからはちよつと離れた場所にある。だから街の人達に、お店を出す予定のコーヒーやサンドイッチを振る舞いつつ開店日を知らせた。

お客さん、来てくれるといいな。

私は階段を下りて、一階に足を踏み入れる。そこは、私の喫茶店だ。

中央付近に設えたカウンターには、椅子が四脚。店内の左右には、テーブル席を二つずつ設けた。

家具は木製で揃えたから、落ち着いた雰囲気がある。

「よし、軽くお掃除を頼もうかな」

私はパンパンと手を叩き、掌の中で魔力を練り上げた。するとライトグリーンの光が零れ落ちていき、その光が床の上で円を描いた。

ふわりと光った円の中から、「ふわわわー」と可愛らしい声を漏らしつつ、小さな妖精達が姿を現す。

蓮華の妖精、ロトだ。

二頭身で、頭の形はまるで蓮華の蕾のよう。ぷっくりした胴体からは、摘まんで伸ばしたような手足が生えている。肌の色はライトグリーンで、つぶらな瞳の色はペリドット。

前世でいうところのゆるキャラみたいで、とても愛らしい。

彼らは、私が魔法契約を結んでいる、精霊の森に棲む妖精達。

力を借りるかわりに、私も彼らの頼みごとを叶える。これは、精霊達と契約する際の条件だ。

私はスカートを押さえながらしゃがみ込み、「お掃除をお願いします」と頼む。

ロト達は、小さなお手で「あいっ！」と敬礼すると、蜘蛛の子みたいに「わー」と散り、店の隅から掃除を始めてくれた。

私はカウンターの奥にあるキッチンに入り、白いエプロンをつける。

キッチンにはオーブンも備え付けたし、作業スペースも広々としている。

今日の朝食はホットケーキ。

喫茶店メニューのタルトに載せる、ミックスベリーのソースも一緒に作る。

こういう果物も、妖精達に頼んで摘んできてもらった。美味しい果実を選んでくれるし、お金もかからないからすごく助かる。

別の妖精達には、コーヒー豆の収穫もお願いした。収穫した豆は、魔法を駆使して焙煎している。今後、じっくり改良していくつもりだ。

くいくいつ。

スカートを引つ張られ、私は床に目を落とした。そこには、ロトが一人。掃除の手は足りているらしく、この子は私のお手伝いがしたいみたい。

私は両手でロトを持ち上げて、作業スペースの上に乗せてあげる。

それでは、始めますか。

まずはミックスベリーをほどよく煮詰めて、ペロツと味見。うん、甘酸っぱくて美味しい。

ロトにも味見をお願いすると、小さなお口でソースをペロツと舐めた。次の瞬間、ぶるぶると震えて、両手で頬を押さえる。それから小さな右手をこちらに突き出した。目を凝らすと、指が立っているのが見える。バッチリって意味かな。

ふふ、と笑いながら、昨日作っておいたタルトにベリーソースを盛り付ける。

完成したタルトを冷蔵庫にしまったら、お次はホットケーキ作り。

厚めのふわふわ生地を何枚も焼き上げていくと、ロトが余ったミックスベリーソースを添えてくれた。

私は冷蔵庫からヨーグルトの容器を取り出し、ロトの前に置く。

「ヨーグルトも添えてくれる？」

そう頼むと、スプーンですくって「んしょつ、んしょつ」と頑張って運んでくれた。

たくさん働いてくれた妖精達の分もカウンターに並べ、一緒にホットケーキを食べる。

皆小さいから、ベリーソースのかかった一欠片<sup>ひとかけら</sup>だけでお腹が一杯みたい。食べる前より、まあるく膨らんだお腹が可愛らしかった。

たくさん焼いたホットケーキ。余りは、精霊の森の皆にも食べてほしい。

ロト達にホットケーキの包みを渡し、バイバイとお別れする。

妖精達は小さな手を振り返し、光る円の中に雪崩れ込むようにして帰っていった。

ホッと息をつき、しばしの間、食事の余韻に浸る。

いつもなら、授業に向かっている頃だ。でも、私はもう学生ではない。

朝食の片付けをしたあとは、チョコレートケーキ作り。

ひとまず、喫茶店のデザートはこの二つに決めた。これからお客さんの要望も取り入れて、メニューを増やしていくつもり。日替わりにするの、いいかな。

チョコレートケーキが完成すると、今度はサンドイッチの材料を準備する。

手際よく、でもマイペースに、鼻歌まじりに開店前の作業を済ませた。

「よし、これで大丈夫かしら……」

店内を見回して、忘れていないかチェック。

カウンターテーブルに置いた砂時計が目に入り、私はそれを何気なくひっくり返した。

落ちていく砂を機嫌よく見つめたあと、看板を出していないことに気付く。

すぐにお店の扉を開けて、小さな階段を下りる。ポーチが汚れていないかを確認しつつ、オープン

ンの看板を立てかけた。

お店の名前は、まったり。

まったり喫茶店。

二階建ての家を見上げ、ちよつぱり誇らしい気分で胸を張った。

「あの、オープンしましたか？」

「どうやら、記念すべき一人目のお客さんが来てくれたようだ。私はパツと振り返り、目の前の女性につこりと笑みを向ける。

「はい！ いらっしやいませ」

——それから、数週間後。

まったり喫茶店は、嬉しいことに繁盛していた。

開店前に振る舞った、コーヒーやサンドイッチが好評だったみたい。

効果は抜群だったわけだけど……正直なところ、ちよつと困っている。

「ローニヤちゃん、コーヒーおかわり！」

「はい、ただいま」

「ローニヤちゃん、今日もこのケーキ、美味しいよ。もう一切れお願い」

「はい、少々お待ちください」

「すみません、カフェモカ二つください」

「はい、かしこまりました」

……忙しくて、目が回りそうだ。それでも、笑顔を崩さずに対応をする。

イメージとは違う。喫茶店がこんな過酷な職場だったなんて。

考えが甘かった。

もっとこう、お客さんが途切れ途切れに来て、猫をなでなでする時間がたつぷりあるイメージだったのに。

ケーキやサンドイッチが余った時にはテイクアウトをおすすめしようとお持ち帰り用の箱まで準備した。だけど、今のところメニューが余る日はほとんどない。それに、テイクアウトをすすめている暇もまったくなかった。

客足は途切れないし、猫をなでなでする時間なんてない。そもそも、うちのお店には猫なんていない。

つまり、まったりする時間が微塵もないのだ！

「はい、お待たせしました」

コーヒーとケーキのおかわりをお出しし、テーブル席にカフェモカを配膳していると、カウンターのお客さんに声をかけられる。

「ところで、ローニヤちゃん。オレの店には、いつ来てくれるんだい？」

「あ、えっと……当分、行けそうにありません。この通り忙しくて……ごめんなさい」  
彼は、レストランを経営しているというお客さん。その誘いを、やんわりお断りする。  
「え〜！ ローニヤちゃんが来てくれたら、サービスするのに」

……だから、この忙しさでは行けませんって言ったのに。

そんな言葉は呑み込んで、令嬢スマイルを浮かべたまま、次の注文に対応する。

「僕のアクセサリー店にも来てよ、割り引きするよ。あ、コーヒーもう一杯」

「申し訳ありません、アクセサリーは当分、買う予定がなくて……コーヒー、今お持ちしますね」

「なあ、ローニヤさん。街を案内してあげるって言っただろう？ いつにする？ それからサンドイッチをもらえるかな」

「お言葉は嬉しいのですが……前にもお伝えした通り、忙しくて……ご一緒するのは難しそうです。ごめんなさい。サンドイッチは少々お待ちくださいね、作ってまいります」

「ローニヤ店長、ラテを一杯！ ついでに君とのデートも注文していいかい？」

「ふふ、デートはメニューにあります。ラテ、今お淹れしますね」

……皆さんに、熱湯をぶっかけて差し上げましょうか。

心の中でそんなことを思ってしまうほど男性客の対応は大変で、疲労もピークだ。

今世での容姿が美しいことは、うすうす気付いていた。でも今までは婚約者がいたから、他の男性に言い寄られる機会なんてほとんどなかった。

それなのに……

正直なところ、かつてないモテ期に戸惑っている。変身魔法を使って営業すべきだったかもしれない。

ちなみに、店内にいるお客さんは男性ばかり。カウンター席に陣取り、カップ片手に立っているお客さんもちらほら。テーブル席には、身を乗り出すようにしてこちらをうかがっている男性達。女性のお客さんも来てくれるけれど……圧倒的に男性客が多い。

まあ、若い女性が一人で喫茶店を切り盛りしているので、物珍しさもあるのだろう。しばらくしたら、落ち着くと信じてたい。

キッチンに戻り、コーヒーとサンドイッチ、ラテの準備をする。

ああ、洗いのものも溜まってきた……このメニューを配膳したらカップを洗わなくちゃ。

段取りを考えながら作業をしている間にも、店内から私を呼ぶ声がある。

「ローニヤちゃん〜!!」

「はい、少々お待ちくださいー!」

……忙しすぎて、目が回りそう。

これでは、前世の二の舞だ。

私が喫茶店を開いたのは、まったくするためだったのに。このままでは、過労で倒れてしまう！  
これは倒れる前に、対策を考えなくちゃ。